

## 令和元年度 身近な教育委員会 実施報告

教育委員会室から外に出て、学校等で開催する「身近な教育委員会」を下記のとおり実施いたしました。

### 記

日時：令和元年5月28日（火）18時30分～20時30分

場所：教育支援センター研修室

概要：第1部 教育委員会（臨時会）

- (1) 令和元年度（平成31年度）教育予算の概要について
- (2) いたばし学び支援プラン2021について
- (3) 小中一貫教育の推進について

第2部 パネルディスカッション

グループ討議・発表

「小中一貫教育の推進について」

※パネルディスカッション及びグループ発表の要旨は、  
次ページ以降のとおりです。

参加者：97名

（内訳）保護者・教職員等 73名（保護者等69名・校長2名・主幹教諭2名）

教育長・教育委員 3名

中川修一教育長 高野佐紀子教育長職務代理者 松澤智昭委員

小・中学校長（校長会代表） 2名

関口文彦板橋第七小学校長 宮田正博上板橋第二中学校長

小・中学校校長（パネルディスカッション登壇） 2名

小澤裕行板橋第二小学校長 関屋裕之桜川中学校長

小・中学校主幹教諭（パネルディスカッション登壇） 2名

池田昌弘桜川小学校主幹教諭 熊谷正人板橋第一中学校主幹教諭

教育委員会事務局関係者 15名

# 令和元年度 身近な教育委員会

## パネルディスカッション・グループ発表要旨

### ◎ パネルディスカッションの概要

【登壇者】（進行：門野指導室長）

＜板橋第一中学校学びのエリア＞ ※中学校1校に対し、小学校3校のエリア

- ・板橋第一中学校：熊谷主幹教諭
- ・板橋第二小学校：小澤校長

※このほか、板橋第六小学校・板橋第七小学校が属する

＜桜川中学校学びのエリア＞ ※中学校1校に対し、小学校1校のエリア

- ・桜川中学校：関屋校長
- ・桜川小学校：池田主幹教諭

#### 【1. はじめに】

（指導室長）

お集まりの皆さんの中で、「学びのエリア」について理解している方はどれくらいいますか？

学びのエリアとは何だろうというお話から入りますが、例えば板橋第一中学校であれば、学区域の関係などで、板橋第二小学校・板橋第六小学校・板橋第七小学校を対象に、同じ学びのエリアとしています。

お配りした表の中に、記載がありますので、ご自身のお子さんたちが、どの学びのエリアに入っているかがお分かりになると思います。

#### 【2. 自己紹介】

（指導室長）

今日は、板橋第一中学校と板橋第二小学校、桜川中学校と桜川小学校の先生方にお越しいただきました。それぞれが同じ学びのエリアに属する学校ということで、色々なお話が聞けるのではと思います。

（板二小校長）（桜川中校長）（桜川小主幹）（板一中主幹）

それぞれ自己紹介。

#### 【3. めざす子ども像について】

（指導室長）

教育長から、子どもたちが変わってきたというお話がありました。

どのようなところが変わってきたと感じますか。

（板二小校長）

板一中学びのエリアでは、「なぜだろうという「問い」を常に持てる子」という子ども像を学びのエリアの4校で設定しました。

4校の校長同士で話したときに、真面目で先生や友達の話をよく聞くが、教科書を読んでもそのまま受け入れるだけで、「なぜそう思うのか」、「自分はどう思う」というような子どもが減り、受け身的な子どもが増えてきているという話になりました。

学習面でも生活面でも同じことが言え、少しマイナスな意見だが、そのような印象を持っています。

(板一中主幹)

私もやはり受け身的な子どもが多いと感じています。

小学校から中学校に上がると、ルール・規律で厳しいと感じるところもあるようです。

成長期でもあり、少し反抗的な子どもなどに対応する必要もあるので、ルール・規律で厳しくする面も確かにあると思います。

(桜川中校長)

昔と今の違いということでは、今の子どもは何を考えているのか分かりづらいと思います。

一方、昔の子どもは自分の考えていることをはっきりと言えて、周りの子どもを大事にしたと思います。

クラスに悪い子どもは確かにいましたが、悪い考えを持っていても、友達にいじわるをしたり、いじめたりするような悪さはしませんでした。

今の子どもは陰湿になる傾向があるように思います。

桜川中学びのエリアでは、「地域の中で育ち、地域で活躍する子ども」「主体的に考え、課題をやり遂げる子ども」「自分の考えを表現できる子ども」というめざす子ども像を設定しています。

(桜川小主幹)

小学校で、いじめはあるとは言いづらいのですが、からかいの延長といえますか、本人がいじめだと感じた場合には、それはいじめだという認識になるので、学期に1回程度、いじめアンケートのようなものを行っています。

その中で、「〇〇さんにいやなことを言われた」などは頻繁に出てきます。

おしゃべりしている中で言い合いになったりして、本人としては悔しくて、傷つけられたと感じているというような聞き取りをするのは日常茶飯事という感じです。

(桜川中校長)

「自分の考えを表現できる子ども」ということをメインに考えています。

実現するためにはどうしたら良いかと考えていますが、昨年、教員向けに月1回開催されている『板橋アカデミー』で、「学級の雰囲気良ければ学力も向上する」、「自分の考えも表現できるようになる」という話を伺い、参考にして取り組んでいるところです。

#### 【4. 今年度の取組について】

(指導室長)

それぞれの「めざす子ども像」を実現するために何か取り組んでいることはありますか。

(板一中主幹)

板一中エリアでは、授業力の向上という話があり、板橋区授業スタンダードに沿って、めあての掲示や授業の振り返りを徹底しています。

子どもが受け身にならないよう、正解が1つでない問いを出したり、答えをわざと深く掘り下げてみたりして、子どもから「なぜ」が言えるような仕掛けづくりを行っています。

(板二小校長)

板橋区授業スタンダードについて、我々のエリアでは改訂版をつくり、教員が一人一人ファイルにしています。

教員が授業をする中で、しゃべり過ぎないように心がけたり、子どもが発表することに対し、問いを投

げかけるような授業を行っています。

なぜそう思うのかということ投げかけるよう、授業の展開部で共通してやることを決めて、実践しています。

(桜川中校長)

めざす子ども像の実現のため、研究校の指定を受け、特に特別活動の中の、学級活動を中心に研究しています。

先ほどの『板橋アカデミー』で伺ったお話と、自身が小中一貫校に勤めていた経験から、小学校の先生は、学級活動を丁寧にやっていることを知っています。

一方、中学校の先生は、学級活動を子どもに任せ、適切なフォローも少ない傾向があるので、中学校の先生にも、小学校の学級活動の手法を学んでほしいと思い、研究をしているところです。

(指導室長)

そもそも、学級活動とはどういったものでしょうか。

(桜川中校長)

いわゆる、「学活」というものです。

例えば、運動会の前なら、種目の出場選手を決めたりするものをイメージしていただければと思います。学級会など、学級の中での話し合い全般ということです。

(桜川小主幹)

めざす子ども像の実現に向けては、子どもたちが自分たちの力で話し合っ、より良い生活をつくっていくという意識に向かうように心がけています。小中学校9年間をとおして、自分たちでがんばったことが将来に結びついていくということが、身をもってわかるような取組を、地域とも将来像を共有することで、地域の中で子どもたちを育てていけるようにと考えています。

(指導室長)

学級、学校、地域の実態によって、それぞれ特色があるということをご理解いただければと思います。

## 【5. 学びのエリアの規模の違いについて】

(指導室長)

学びのエリアによって、中学校1校に対し、小学校が1校あるいは複数校というパターンがあるが、その違いはありますか。

それぞれのエリアで、良い点・悪い点など、お聞かせください。

(板二小校長)

やりにくい点ということでは、学校同士の距離が離れているところです。

どの学校も10分程度離れているので、そこは大きいかなと思います。

良い点は、3校の小学校長同士のコミュニケーションが活発で、連携がよく取れているところです。

(板一中主幹)

小学校3校ということで、実務的な運営面で大変なところもあります。

学びのエリアで研修を行う際の日程調整などもそのひとつです。

良い点は、意見交換が活発にできる場所だと思っています。

(桜川中校長)

小中一貫教育の理想としては、施設一体型で校長が1人ということなのかと思いますが、やはり予算の関係などもあり、難しいと思います。

板橋区では、学びのエリア型ということで、どのように連携していけるかが大事だと思います。

校長同士で意見がぶつかってはいけないので、コミュニケーションを密に取ることが大事だと思います。

小学校が複数校の場合には、中学校の校長がリーダーシップを発揮し、小中学校9年間の成果のイメージを示し、共有することで、エリアとして自然とまとまるのではないかと思います。

(桜川小主幹)

4月に自分が小中一貫教育の担当となったときに、すぐに中学校に連絡を取りました。

中学校1校と小学校1校の関係なので、やり取りがすぐに済むというところはやはり良いと思います。

## 【6. 子どもにとってのメリットについて】

(指導室長)

小中一貫教育によって、子どもにはどのようなメリットがあるとお考えでしょうか。

(板二小校長)

先日、本校の授業の様子がテレビで放映されました。

研究テーマは、「未来を自らの力で切り拓く確かな学力を育む指導の工夫 義務教育9年間をつなぐ読み解く力の育成をめざして」ということでしたが、合同4校で研究するのは、教員の授業力の向上のためということです。

授業を見合い、批評し合うことで、教員の授業力の向上につなげるよう進めているところです。

(指導室長)

小中一貫教育により、子どもの学力は本当に向上するのでしょうか。

(板二小校長)

読み解く力の育成ということで、ひとつひとつ土台となるところを指導していきます。

結果はもちろん分からないところも多いですが、着実にやるべきことをやっています。

(板一中主幹)

本校にとっても、勉強になる部分が多いと感じています。

また、学力向上という目標がある中で、小学校の内容を中学校が分かっていないということが多く感じています。

本校には、小学校の教科書は全てそろっていますが、算数の教科書を見れば、中学生で取り扱う内容を小学生ですでにやっているというようなことも分かるので、それに応じて教え方も変えられるので、結果として、学力向上につながると考えています。

(桜川小主幹)

小中一貫教育に携わる前は、小学校を6年間で終えた後は、中学校にお任せという感じでした。

それが、小中一貫教育に携わってからは、送り出す先の中学校の顔が見え、中学校でここまで育ててほしいという思いが出てきます。

小学校と中学校ですり合わせができたり、相手の顔が見えたりするので、この先はこの先生にお願いしたいという思いが出ることで、より丁寧に子どもを送り出せるようにと意識するようになりました。

(指導室長)

子どもたちにとってはどのように感じられると思いますか。

(桜川小主幹)

教員が変わると子どもも変わると思います。

小学校を卒業して、行く先の中学校の先生も知り合いたよということが、子どもにも伝わるので、小学校だけが良い顔をしていれば良いということではなく、中学校にいても、良い意味で子どもたちも気を抜けないぞという感じになるのではと思います。

(桜川中校長)

小中一貫校に勤めていた経験から言いますと、小学生の目から見ると、小学6年生がトップだったのが、中学3年生までが視界に入ることになり、なりたい目標が上がるように思います。

憧れの存在が身近にいる、あんなふうに、「足が速くなりたい」、「勉強ができるようになりたい」という思いを持つようになるのです。

一方で、中学生は、小学生の世話をすることにより、優しい子どもが増えたような気がしました。

【7. おわりに】

(指導室長)

本来はまとめのお話をさせていただくところですが、この後、率直な意見・感想を一緒になって考えていただき、より良い学校教育が提供できるよう、ともに進んでいければと思います。

グループ討議で様々な意見・感想をお出しいただければ幸いです。

本日はお忙しい中ご参加いただき、誠にありがとうございました。

## ◎ 各班の発表内容

【B班】

- ・期待すること及び疑問や心配なことについて話し合った。
- ・期待することは2つある。1つは、子どもの学力向上。小中9年間のカリキュラムの研究など、教員同士の研究が活発になることで、共通認識を持って授業を進めてくれると思う。
- ・もう1つは、小中学校が交流する場面が増えることで、いじめの問題などにも効果があるのではないかと思う。中学生が小学生の面倒をよく見てくれるようになることなどにも期待している。
- ・不安なところは、校長先生の意識の格差があるのではないかということ。
- ・また、小中一貫教育で本当に不登校やいじめが減るのかは、まだ疑問に思っている。

【F班】

- ・中学校では、小学校で行っている「アクティブラーニング」などを行うのが難しいという印象がある。
- ・やらなければいけないことがとにかく多く、時間を取るのが難しいという印象もある。
- ・中学校1校対小学校1校のエリアの方が、教育の内容が進んでいると思う。
- ・小学校と中学校の連携は良くなっていると思うので、小学生が中学生の様子などをもっと見られたら良いと思う。また、小学校同士でも、もっと交流があるとさらに良いのではないかと思う。

【I班】

- ・小中一貫教育はどのようなものか、それぞれの意見と期待することについて話し合った。
- ・学力向上への積極的な意見は出なかったが、いじめや不登校など、地域のコミュニティに期待するよ

うな意見が多く出た。

- ・今後の進め方について、「コミュニティ・スクール」、「学びの連続性」というキーワードが出たが、まだまだ分かりづらいと思う。丁寧に説明し、それぞれの役割が明確になると進めやすくなると思う。

## ◎ 教育長の講評

### 【教育長】

皆様、本日はお疲れ様でした。

お仕事あるいは家事等でお疲れのところ、多数お集まりいただきましたこと、感謝いたします。

昨年は、「教職員の働き方改革」、「板橋区コミュニティ・スクール」というテーマで行わせていただきましたが、今回のテーマはなかなか難しい話合いになるのではないかと考えていました。

「小中一貫教育」って、結局は何だろうという疑問が帰り道に残るのではと危惧していました。

ここで、一つだけ勘違いしないでいただきたいのは、板橋区はこれから「小中一貫校」や「義務教育学校」をどんどんつくろうとしているのではないということです。

こうした学校をつくった場合、その学校では取組が進みますが、ほかの学校では進まないということになりがちです。

私たちがめざすのは、どの小学校でも、中学校は楽しそうだと思うようなことでして、先ほど、校長先生の話にもありましたが、中学校の子どもたちが、自分たちの後輩を、自分たちのように立派に育てようというような雰囲気、板橋区の全ての中学校が包まれていくことです。

B班の発表の中で、校長先生の意識が大事だというお話がありました。

まさにそのとおりで、小中一貫教育の肝は、校長先生はじめ先生方の意識が変わることにあります。

これまでの学校制度で考えると、小学校は小学校で完結というつくりです。

すなわち、あくまで1年生から6年生で終わり、6年生まで育てて卒業させるのがゴールという考えです。

一方で、中学校は12歳までのことは関係なく、中学校で預かった13歳から15歳までのことを考えれば良いというように、小学校と中学校で、それぞれが完結していた状態です。

それはあくまで大人の感覚であって、子どもたちは6歳、小学校1年生から、15歳、中学校3年生までを一貫して学びあるいは暮らしているのに、小学校・中学校の先生方がそのような完結型の意識で良いのかというダウトをかけたのが小中一貫教育ということになります。

例えば、来年から小学校でもいよいよ英語科の授業が始まります。

小学校5・6年生では週に2時間、3・4年生では外国語活動として週に1時間。

中学校では週に4時間になりますが、それではそこで、中学校は小学校でやってきた内容を知らなくて良いのかということになります。

一方で、小学校でもこれから中学校でどのような学習をしていくのかを知らなくて良いのか。

例えば、小学校で張り切り過ぎて、中学校で学習するような内容をどんどん教えて、英語嫌いの子どもをつくってしまうような状況で果たして良いのか。

小中学校お互いの内容を知っていれば、ここは中学校でじっくりと教えてくれるので、小学校は興味関心を引く内容や指導方法で良いのではないかという考えにもなります。

これは英語に限らず、算数・数学や社会など全ての教科にもつながります。

ただし、これらは子どもや保護者が考えることではなくて、先生方が考えることであり、だからこそ、先生方の意識が変わらないといけないということになるのです。

先生方は本当に大変ですねと、心配の言葉をかけてくれる保護者がいらっしゃいました。

そのとおりなのですが、しっかりと板橋区全体で取り組み、子どもたちの9年間の育ちというものを学校と家庭と地域で見てもらうための、ツールの1つとして、小中一貫教育ができればと思っています。

子どもたちが6歳から15歳まで、安心安全に過ごすことができる、自分のやりたいことができる、自己実現を図ることができる、そのためにも、きちんと学力をつけてあげる。

そうした学校になることを目的として、小中一貫教育というツールを、来年度からそれぞれの学びのエリアで取り組んでいきます。

また、中学校の入学予定校変更希望制はどうなるのかというご質問もございました。

こちらについては、共通して、それぞれの学びのエリアで学ぶことができてるし、中学校は楽しいところだという意識を子どもたちが持つことができれば、どこの中学校に行っても弊害は起きないのではないかと考えています。

今日は、今回参加した皆さんに小中一貫教育を考えていただくきっかけとなるファーストステップだと思っています。

私たちもそれぞれの班でいただいた意見をもとに、教育委員会事務局と学校現場でますます協議を重ねながら、また皆さんにお話するような機会を持ちたいと思っています。

本日は長時間に渡り、誠にありがとうございました。